

8-10 世紀ヒンドゥークシュ山脈の南北

稲葉 穰

I 750 年以前のカーピシー/カーブル

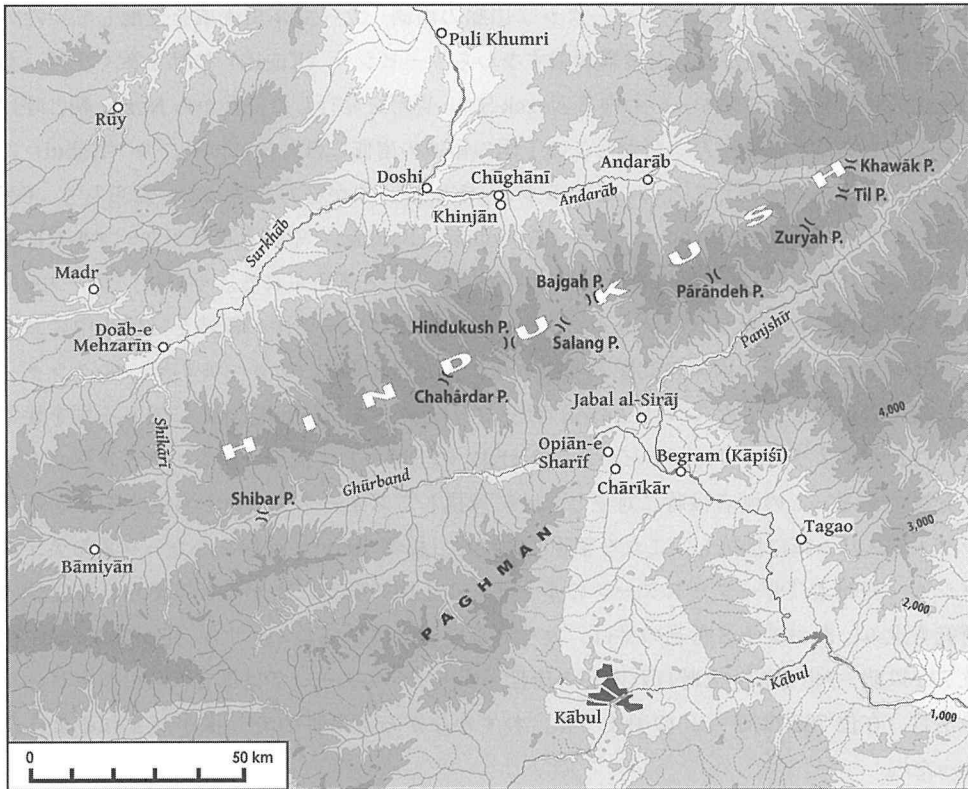
651 年にササン朝の最後の皇帝ヤズデギルド 3 世 (Yazdagird b. Shahriyār) がメルヴ (Merv) 近郊で殺された後、ヤズデギルドを追ってスィースターン (Sistān) に到達していたアラブ・ムスリム軍は、同地を拠点としてさらに兵を進め、現在のアフガニスタン東部へと向かった。この当時ヒンドゥークシュ山脈の南側、カーブル川流域を支配していたのは、7 世紀に玄奘三蔵が訪れた迦畢試国すなわちカーピシー (Kāpīsi) に都を置く王国 (桑山正進の呼ぶ Khīngal 朝で、いわゆる Nezak Shāh 貨幣を発行したことから Nezak 朝と呼ばれることもある) であった。しかしこの王国の領域の南側には、後にカーブル (Kābul) にテュルクシャー朝を開くことになるハラジュ (Khalaj) 族が勢力を持っていたらしく、665 年頃にアブドゥッラー・ブン・サムラ ('Abdullāh b. Samura) 率いる軍勢がカーブルを征服した後、これを奪還したのもこのハラジュ勢力であったと考えられる。その後、カーブルに拠点を置いたこのハラジュ・テュルクシャーは、カーピシー王国の領域をほぼ手中におさめ、ヒンドゥークシュ南側の支配者となった。一方 680 年代、カーブルのテュルクシャーの一族の者が南下してガズニ (Ghazni)/ザープリスターン (Zābulistān) に抛り王国を建てた。これがイスラム資料にルトビール (Rutbil) の王国として記録される、テュルクシャーの分家である。この両者は時に対立し、時に連携してスィースターンから北上をはかるアラブ・ムスリム軍に抵抗し、これを撃退し続けた [稲葉 1991]。近年このカーブルのテュルクシャー朝およびザープリスターンのルトビール王国の発行にかかると考えられる貨幣の研究も進み、おおよそ 8 世紀の半ば、カーブルで言えばフロム・ケサル (From Kesar: 在位 736 以前~745 以前) と呼ばれる王の治世、ザープリスターンでは第 3 代目のルトビール (Rutbil) の治世 (在位 736 以前~?) の頃までは、わずかながらも事件の有り様がたどれるようになった¹⁾。

しかしながら、丁度ムスリム側でアッバース革命が起こり、イスラム世界の主がウマイヤ朝からアッバース朝へと遷った 8 世紀半ば頃を境に、アフガニスタン東部で何が起きていた

1) カーブルのフロム・ケサルの治世については稲葉 2010a を参照せよ。またフロム・ケサルの後継者と覚しきヒンギラ (Khīngila) については桑山 1992b: 33 を、ザープリスターンについては、稲葉 1991; Inaba 2005; Gyselen 2010 を参照。

のかはわからなくなる²⁾。860年代以降スイースターンのサッフアール朝のヤアクーブ・ブン・アルライス (Ya'qūb b. al-Layth) がアフガニスタンを征服し、その過程でザーブリスターンのルトビールの王国を滅ぼしカーブルを征服する少し前、カーブルの支配者がテュルク系の王朝からヒンドゥー系の王朝へと切り替わったこと、その後ヒンドゥーシャー朝として知られる勢力が11世紀初めにガズナ朝によって倒されるまで、カーブル川流域をおさめていたことがわかるのみである [Rahman 1979; Bosworth 1965]。しかしサッフアール朝以降にしても、やはり960年代にアルプ・テギン (Alp Tegin) がカーブルを攻め、ガズニを征服して後のガズナ朝の礎を置いた時期までは、この地域がどのような状況であったのかは不明なままである [cf. 稲葉 1994: 235-238]。

本稿は、わずかではあるが近年知られるようになった材料を用い、8世紀半ばから10世紀半ばの時期にヒンドゥークシュ山脈の南北、特に南麓地域がどのような状況にあったのか、



地図1 ヒンドゥークシュ山脈の南北

2) もちろんこれには、僅かとはいえそれまでの情勢を記録していた漢籍資料に、安史の乱以降中央アジア以西の情報がほとんど見られなくなることも影響している。

ムスリムはいかにしてこの地域を支配するようになったのかを考えようとするものである³⁾。言うまでもなく利用できる材料はきわめて限られているが、それでも少なくとも現時点でどこまで我々は事態のあり方を復元できそうなのか整理しておくことは、今後もある程度は増加するであろう資料・情報を考察するために必要な作業と信じる。

II イブラーヒーム・ブン・ジブリール (Ibrāhīm b. Jibril) の遠征 (c. 729-93 年)

文献資料において8世紀後半のヒンドゥークシュ南側に関する大きな事件として記録されているのは、バルマク (Barmak) 家のファドル・ブン・ヤフヤー (Fadl b. Yaḥyā) がホラーサーン総督であった時期に派遣された遠征軍である⁴⁾。ヤアクービー (al-Ya'qūbī) は以下のように記録する。

176 年 (792-93 年), カリフ・アッラシード (al-Rashīd) のホラーサーン総督を務めていた時期, ファドル・ブン・ヤフヤー・ブン・ハーリド・ブン・バルマクは, イブラーヒーム・ブン・ジブリール率いる軍を, カーブルシャーの領域へ向けて送った。トハリスターンの王達 (*mulūk*), ディフカーン (*dihqān*) 達がこの軍勢に加わった。そのうちには, バーミヤーンの王であったアルハサン・アッシール (al-Ḥasan al-Shīr) もいた。この軍はゴールバンドのまち, ゴールバンドの峠 (*fajj Ghūrvand*), سارحويد および سدل استان, そして人々が大いに崇敬していたところの偶像が祀られていた Shah

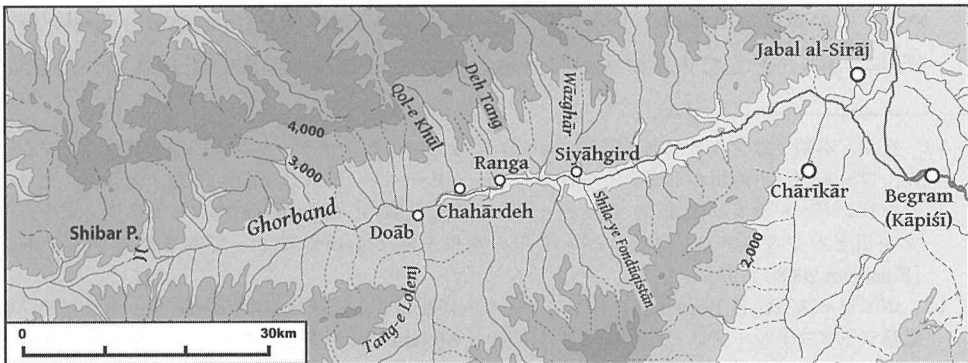
3) なお、本稿ではフスマン (G. Fussman) にならい、ヒンドゥークシュ山脈南麓、パンジシール、ゴールバンド両川が形成する平地を「コー・ダーマン (Koh Daman) 平原」と呼ぶ。それは、北をヒンドゥークシュ山脈に、南をカーブル北側の丘陵に、また西をバグマーン山脈、東をカーブル川とパンジシール/ゴールバンド川の水系を隔てる山地によって囲まれた平原である [Fussman 2008: 119]。

4) ボズワース (C. E. Bosworth) はヤアクービーが記録する遠征は実は 787-88 年、ホラーサーン総督ジャアファル・ブン・ムハンマド (Ja'far b. Muḥammad) が息子のアッバース (al-'Abbās b. Ja'far) に命じて行かせたものだとし、イブラーヒームはファドルによってスイースタン総督に任じられた後に南方からカーブル遠征を行ったと述べている [Bosworth 1968: 85-86]。しかしながらボズワースが挙げる文献のうち、アッバースの遠征に言及するのは後代のイブン・アルアスィール (Ibn al-Athīr) のみで、10 世紀に書かれたタバリー (al-Ṭabarī) の史書やジャフシャリー (Muḥammad b. 'Abdūs al-Jahshiyārī) の『宰相と書記の書 (*Kitāb al-Wuzarā' wa al-Kuttāb*)』はイブラーヒームがカーブル遠征を行ったと記している。特に後者は「ファドルはイブラーヒームをカーブルに派遣した。イブラーヒームは同地を征服し多大な富を得た。その後ファドルは彼をシジスターンに任じた。」と、明らかにイブラーヒームの遠征がスイースタン赴任以前に行われたように述べている [Jahshiyārī: 192]。無名著者の『スイースタン史 (*Tārīkh-e Sīstān*)』はイブラーヒームがスイースタンに赴任したのを 795 年のこととしているから、時間的にもこの北からの遠征がイブラーヒームに率いられた可能性は十分ある。それゆえ本稿ではこれを「イブラーヒーム・ブン・ジブリールの遠征」とした。なお、『スイースタン史』はイブラーヒームがスイースタンに赴任した後にカーブルへ遠征したと記しているが、これを額面通り受け取るなら、彼は 795 年以降、今度は南方からカーブルを目指して二度目の遠征を行ったのかも知れない [Tārīkh-e Sīstān: 154-55]。

Bahār を制圧した。偶像は破壊され、焼かれた。カーブルシャー [の統治下] のまぢまぢのうち、کاوسانの人々とその王 عمرکس،そして مازران و مرحد و مازرانの人々とその王達とがファドル・ブン・ヤフヤーのもとへ安堵を求めて来た。彼らは安堵された。[Ya'qūbī: 290]

短いながらもここにはいくつか興味深い内容が記されている。遠征軍にトハーリスターンの王達やディフカーン達に加わったという記述が意味するのは、第一に、この遠征軍が北からヒンドゥークシュを南へ越えたということである⁵⁾。ここにバーミヤーンの王が加わり、さらにゴールバンドのまぢを征服したと書かれていることからこれは確実であろう。ゴールバンドとはまぢの名前であると同時に、ヒンドゥークシュ山脈南麓を東へ流れパンジシール (Panjshīr)⁶⁾ 川と合流した後にカーブル川に注ぐ川の名前でもある。

さて、ここに現れる地名について少し考えてみよう (地図2参照)。まず「ゴールバンドの峠」が何を意味するかに関しては2つの可能性がある。1つはバーミヤーンの側からゴールバンド流域へ出るルート上にあるシバル (Shibar) 峠であり、いま1つはゴールバンド渓谷のどこかからヒンドゥークシュ山脈を北へ越える峠である。しかしイブラーヒーム軍はバーミヤーン王と合流した上で東へ向かったのであるから、ここに見えるゴールバンド峠は



地図2 ゴールバンド川流域

- 5) トハーリスターンの王達、ディフカーン達が具体的に誰を意味するのか十分明らかではない。それでも我々は1990年代に発見されたバクトリア語文書、アラビア語文書のおかげで、8世紀後半には未だローブ (Rob) の王や、カダグスタン (Kadagstan) の支配者がアラブの宗主権を受け入れながらも自らの統治を存続させていたらしいことを知っている [cf. 宮本 2012]。さらに言えばこの遠征軍の総司令官としてバルマク家のファドルの名が見えるのも示唆的である。バルマク家が権力を握った背景として彼らがイラン高原東方に所有していた商業ネットワークの存在を指摘する向きもあるが、それらを通じてバルマク家がトハーリスターンの在地小勢力を動員することが容易であったかも知れないからである。なおバルマク家に関しては la Vaissière 2010 参照。
- 6) 現在この川はパンジシールと呼ばれ、その流域の地方もパンジシール地方と呼ばれているが、古くはこの地名は Panjhir と記されていた。本稿では現在の地名、地勢をあらわす際には「パンジシール」、歴史地名として言及する場合には「パンジヒール」と表記する。

現在のシバル峠を意味していると考えの方がよからう⁷⁾。

一方「ゴールバンドのまち」がどこにあったのかは特定しがたい。ゴールバンド川には南北から何本かの川が合流しており、それぞれの合流地点にある程度の広さの平地と耕地が形成されている（地図参照）。シバル峠から東に向かうと、まず南から Tang-e Lolenj 川が合流する地点に現在、ドアーブ（Doab または Doab-e Ghorband）のむら、北から Qol-e Khül 川が流れ込む場所にチャハールデフ（Chahar Deh-e Ghorband）、同じく北から Deh Tang 川が流れ込むあたりにランガ（Rangah）のむらがあって、これはゴールバンドと呼ばれることもあるようである（RIP-ABC: III, 411-422; Adamec 1985: 220-8）。おそらく「ゴールバンドのまち」はこれらの支流の合流点のどれかにあったまちを指すのだろう。

その次に言及される 2 つの地名は、読み方が分かっていない。マルクヴァルト（J. Marquart）はこれをそれぞれ *شارجود* および *يندلستان* と復元し、前者を『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』に見える「昔漢の天子の子がここに人質になっていたとき作った」沙落迦と結びつけ⁸⁾、後者を中国の僧悟空が 8 世紀後半のガンダーラにおいて報告する寺の名、罽膩吒王演提灑寺と関連づけて説明しようとするが、説得力のある議論とは言えない [Marquart 1901: 282-83]。むしろ、上述のようなゴールバンド渓谷の地勢と現在のまちや村の立地を考慮に入れるなら、少なくとも *سياه گرد* は *سياه گرد*、すなわちシヤーフギルド（Siyāhgird）の写し間違いと見た方がよいと思われる⁹⁾。シヤーフギルドは上述のランガの東、Wāzghār 川が北からゴールバンド本流に合流する渓谷入り口の平地にあるまちである。このシヤーフギルド付近で、南からゴールバンド本流に合流するのが Shīla-ye Fondūqistān 川であるが、いわゆるフォンドウキスターン仏教寺院址が発見されたのはこの川を南に遡った地点である [Hackin 1959; Novotony 2007]¹⁰⁾。そう考えるとムスリム軍がこの時破壊した Shāh Bahār

7) マルクヴァルトは、この *fajj Ghūrband* は、ペルシア語の *pazh-e Ghūrvand* にあたるとし、ムカッダシー（al-Muqaddasi）の *Aḥsan al-taqāsīm* などに見える *Basghūrfand* と同じものだとする [Marquart 1901: 280]。ちなみに藤田豊八は *Basghūrfand* とは、7 世紀半ばにバーミヤーンに置かれた寫真都督府の管轄下に名に見える「縛時伏城」にあたるのではないかと考えた [『新唐書』巻 43 下; 藤田 1931: 55a]。

8) 沙落迦については桑山 1987: 173 参照。

9) 1884-5 年にゴールバンド渓谷を踏査した「アフガン国境策定委員会（Afghan Boundary Commission）」のピーコック（W. Peacocke）大尉は、シバル峠より東のゴールバンド渓谷が大きく二つの地域に分かれていたと記録している。すなわち、シバル峠の麓からドアーブまでの地域と、そこからバゲ・アフガン（Bagh-e Afghan）までを包括する地域であって、前者は当時 Shaikh Ali hakim のミール・スルタン（Mir Sultan）の統治下に、後者はチャハールデフに居住していたイシャーン・サイヤド・アズィーズ・ホージャ（Ishān Saiad Aziz Khoja）の統治下にあった。これを参照するなら、ヤアクービーの記録するゴールバンド渓谷の地名のうち、ゴールバンドのまちというのはドアーブあたりを、その次の地名は渓谷の東側の中心地を指したものであるかもしれない。

10) 想像を逞しくするなら、*سندستان* についても、これを **فندوکستان* の誤った書写と見ることも可能かもしれない。ただし Siyāhgird にせよ Fondūqistān にせよ、それがどれほど古く遡りうる地名なのかは不明である。

(<shāh vihāra「王の寺」)こそが、フォンドウキスターンではないかとも疑われるが、残念ながら現在知られている限りではフォンドウキスターン寺院に大きな破壊の痕跡や、仏像が引き倒され焼かれた痕跡は見られないようである。ただし、玄奘はカーピシー国に2つの「(旧)王伽藍」の存在を記録しているので、ここでいう Shāh Bahār がそのどちらかである可能性は非常に高い¹¹⁾。

カーブルシャーの支配下にあったまちまの王と民がムスリムに降伏してきたという記述も二重に興味深い。第一に、カーブルシャーのもとにさらにローカルな支配者達が服属していたことをこの記述が示していること、第二に、マルクヴァルトが疑う通り、もしここに見える *كوسان* が Kāpīśā/Kāpīśi を指しているのであれば [Marquart 1901: 280; cf. Cunningham 1871: 23], 8世紀の末にカーピシーには未だに王が居て、これがカーブルシャーに服属していたことになるからである¹²⁾。第一の点はひとまず措き、第二の点について次章で検討してみたい。

Ⅲ カーピシーとパルワーン

Ⅰ 8世紀以降のカーピシー

最初に記したように、7世紀後半以降インドウクシュ山脈南側、カーブル川流域地域の支配権はカーピシーの王の手から新興のカーブルのテュルクシャーの手に移っていった。この移行がどのようにして行われたか、その詳細は残念ながら不明だが、これまでの研究では暴力的な、たとえばカーピシー都城の破壊のような事件は起きなかったのではないかと考えられている。実際8世紀に入ってもカーピシーと覚しき国名が漢文資料に言及されるなど、カーピシーの都城自体は規模を縮小したかもしれないがしばらくは存続していたように見える [cf. 稲葉 2010b: 690]。そうであるなら上述のヤアークビーの記述に見える *كوسان* がカーピシーのことであるとするマルクヴァルトの見解は考慮する価値がある。つまり少なくとも8世紀末、カーピシーに未だ王も都城もあったことをそれは示唆するからである。

11) 玄奘はカーピシー大都城の北西、大河のほとりに2つの「旧王伽藍」があったと記している。この2つがどこにあったか正確な場所は不明だが、後述のジュエット (A. C. Jewett) がジャバル・アッシラージ (Jabal al-Sirāj) で発掘したとされるレリーフや、やはりジャバル・アッシラージ近辺で発見されたとされる仏像の存在は、ゴールバンド川とサラング川の合流地点近くに仏教寺院があった可能性を示している (ただし、後者についてフスマンは実際は Sarai Khuja から出土したものと見ている [Fussman 2008: 174])。それらが「旧王伽藍」であったなら、Shāh Bahār と呼ばれて不思議はない。桑山 1987: 174; 1990: 283 参照。

12) さらにこの点は、ムスリム軍がゴールバンド渓谷を制圧した時点で、そこより東の小勢力が降伏してきたため、軍事作戦自体はコー・ダーマン平原およびその南のカーブルには及んでいなかったことを示唆すると思われる。前注に述べたようにもし Shāh Bahār が「旧王伽藍」のどちらかであって、それがゴールバンド渓谷入り口付近にあったとするなら、その推測はさらに補強されるだろう。

この問題についてももちろんより確度の高い情報を提供し得るのは、カーピシー王国大都城に比定されているベグラーム (Begram) 遺跡の最上層部の様相である。ギルシュマン (R. Ghirshman) は自身が調査した区画の最終フェーズについて次のように述べている。

ベグラーム=カーピシーのまちの第三期すなわち最終期は破壊の痕跡を示していない。我々が調査した区画では、敵によるまちの破壊的占拠があったようには見えない。むしろ、我々は、侵入者から逃れようとして住民が自発的に退去したところのまちの廃墟に、自分たちが立っているのだという印象を受けた。[Ghirshman 1946: 41]

ギルシュマンは自らの編年に従って、まちがエフタルの侵入によって4世紀末に放棄されたと考えたが、特にベグラーム第三期の年代については桑山による編年の見直しがなされ、玄奘の目撃したカーピシー大都城こそがベグラーム第三期であると考えられる [Kuwayama 2010]。そうであるなら、ギルシュマンの観察したようなまちの放棄を、ずっと下った時代、たとえば8世紀のことであったとし、上記のヤアクービーに見えるكوسانこそがカーピシーのまちの最後期を示すのだと考えることも可能になるだろう。ただしフスマンが注記するように、ベグラーム遺跡自体はその後の歴史の中で最上層が削り取られてしまい、まち自体の最終フェーズがどのようなものであったのかを判断するのは極めて困難であるという点には留意しておかねばならない [Fussman 2008: 156]。

2 パルワーン (Parwān) の登場

ところでヤアクービーよりはやや年長のイブン・ホルダーズビフ (Ibn Khurdādhbih) は自身の著作の中で以下のように記している。

カーブルはトハリスターンの辺境 (thaghr) の一つである。それに属するまちまちには *فارواف, ازران, خواس, خشك, خبره* がある。カーブルにはアロエが産するが、最上のものではない。ココヤシ、サフラン、シトロソもある。というのもそこはヒンドの地に隣接しているのである。[Ibn Khurdādhbih: 37-38]

筆者は、ここで *فارواف* と書かれている地名が *فاروان* の誤記ではないかと考える。桑山が指摘するように10世紀以降のアラビア語、ペルシア語資料にはカーピシーの名前が登場することはない。ヒンドークシュ南麓の都市としてもっばら登場するのは、カーブルを除けば、*بروان/پروان* あるいは *فروان*、すなわちパルワーンのみである。パルワーンが文献に現れる最も古い事例は、上掲のイブン・ホルダーズビフの例を除けばヤアクービーの地理書に見える *بروان* である [Ya'qūbi: 288]。単純に考えるなら9世紀以前のある時点でカーピシーはコー・ダーマン平原の中心の座をパルワーンに明け渡したということになるだろう。10世紀に書かれたイスタフリー (al-Iṣṭakhri) やイブン・ハウカル (Ibn Ḥawqal)、ムカッダスイー (al-Muqaddasī) らのアラビア語地理書は、ヒンドークシュ南麓について、特に後述のパンジヒール銀山について詳細に述べるが、パルワーンについてはほとんど具体的な記述がない。しかし同じく10世紀にアフガニスタンで書かれたペルシア語地理書、*Hudūd*

al-‘Ālam はこのまちについて

パルワーン (バルワーン) は非常に快適なまちで、商人たちの集まる場所である。それは「インドへの門 (dar-e Hindūstān)」である。[Minorsky 1970: 112] と述べる。ちなみに「インドへの門」という表現は *Hudūd* にもう一箇所、南方のブストを形容する箇所 で用いられている [cf. Minorsky 1970: 110]。

ではこのパルワーンは一体どこにあったまちなのだろうか。ここで注目すべきは、*Hudūd al-‘Ālam* がパルワーンを「インドへの門」と呼び、商人たちが集まる場所だと記していることである。6世紀から7世紀初にかけて活躍したインド人僧ダルマゲプタ (Dharmagupta) の伝である『続高僧伝』巻二達摩笈多伝には迦臂施 (カーピシー) 国について「その國はすなわち北路の會するところ。雪山の北陰の商人はみなその境にあつまる (其國乃是北路之會。雪山北陰商侶咸湊其境。)」[『大正藏』: L, 435a] とある。これと *Hudūd al-‘Ālam* の記述を比べるなら、カーピシーのまちがイスラーム時代になるとパルワーンの名で知られるようになったという可能性も考慮せねばならない。19世紀にマッソン (C. Masson) がベグラームから蒐集した貨幣にはパルワーンで発行されたイスラーム時代の貨幣が多数含まれていた¹³⁾。さらにバルトリド (W. Barthold), ミノルスキー (V. Minorsky) らはパルワーンがゴールバンド川とパンジシール川の合流点近くにあったとしているが、現在の地形でいう限り、ゴールバンドとパンジシールの本流同士が合流するのは、まさにベグラーム遺跡のすぐそばなのである¹⁴⁾。

3 19世紀のパルワーン

20世紀以降パルワーンはほぼコー・ダーマン平原の西部を覆う州の名前として用いられるようになり、その中心地はパグマーン山脈東麓のチャーリーカール (Chārikār) であった。アダメック (L. W. Adamec) は、このチャーリーカールが古くパルワーンとして知られるまちだったと記している [Adamec 1985: 639]。しかし1911年、ハビーブラー・ハーン (Habibullāh Khān) 治世にジャバル・アッシラージに水力発電所を建設するため招かれたアメリカ人技師ジェウエットは、以下のように記録している。

ジャバル・アッシラージ、すなわち古のパルワーンのまちのあった場所はヒンドウーク

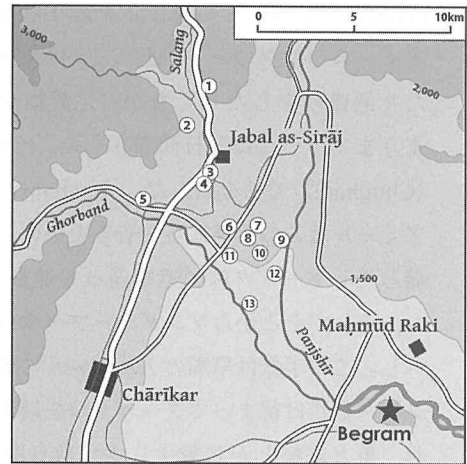
13) 筆者自身の大英博物館における調査 (2011年) による。

14) “In the valley of Panjshīr were the towns of Gārbāya (two day’s journey from Andarāb), Bahjīr (one day’s trip further down) and Parwān or Farwān (two more days); the last one still has this name today, and is located near the confluence of Ghūrband with Panjshīr.” [Barthold 1984: 23]; “Parvān situated at the confluence of the Ghōrband and Panjshīr rivers ought to come geographically after § 23, 79., but just between them must have passed the frontier of Tukhāristān and Kābul. Parvān is still shown on the maps to the north-east of Chārikār.” [Minorsky 1970: 348]。なおフライ (R. N. Frye) はパルワーンが現在のジャバル・アッシラージの近くと記しながら、一方でパルワーンが古の「コーカサスのアレクサンドリア」(「カピサのアレクサンドリア」)のあった場所ではないかとしている [EF²: “FĀRWĀN”]。

シュの山麓に位置し、そこかしこに高い白い壁が立ち並んでいる。[Jewett 1948: 36] 彼はさらに工事にあたって発掘した場所から、砦の遺構、陶器、タイル、石臼などの道具類、墓石、切石、水道管、ターフィー体の文字の刻まれた銅貨、鏃、および仏像の頭部を発見したという [ibid. 203]。これに基づきボール (W. Ball) やフュスマンは、ジェウエットの言うように現在のジャバル・アッシラージこそが古のパルワーンの場所だったとするのである [Ball 1982: I, 131; Fussman 2008: 173-4]。

ジェウエットよりも 20 年余り前、ロシアとアフガニスタンの国境策定のために組織された「アフガン国境策定委員会」¹⁵⁾ の調査団員達が北部および中部アフガニスタンを踏査し、詳細な報告記録を残している。その中で、調査団の中心メンバーのひとりだったメイトランド (P. J. Maitland) 大佐のチームの一員タイマス (D. S. Taimus) はヒンドークシュ山脈北側のナリン (Narin)、アンダラーブ (Andarāb) からハワーク (Khawāk) 峠を越えてチャーリーカールに旅したが、その報告の中でパルワーンに属する村々として、Tajikan, Deh-e Bala, Mianah Guzar, Matak, Shinwari, Harif Khel, Rasuldad Khel, Chinaki Pain, Khwajagi, Kamangar, Aziz Khel, Ibrahim Khan の名を挙げる。これらは現在でも、ゴールバンド川とパンジヒール川の北、ヒンドークシュ山脈から流出し、ゴールバンドと合流するサラング川の両岸に位置する村々である [RIP-ABC: V, 331-2] (地図 3 参照)。このことから 19 世紀後半のパルワーンが、現在ジャバル・アッシラージが位置している平原の中にあっただことがわかる。

同様に 19 世紀前半マッソンはパルワーンについて、それがベグラームから北西 19 度の方向、8 マイルほどの距離のところにあったと記している [Masson 1842: III, 166]¹⁶⁾。以上のことから、19 世紀にはパルワーンのまちはサラング川がコーダーマン平原へ注ぐ口ほど近い場所、ヒンドウー



① Tajikan, ② Deh-e Bala, ③ Mianah Guzar, ④ Munarah, ⑤ Pul-e Matak, ⑥ Shinwari, ⑦ Harif Khel, ⑧ Rasuldad Khel, ⑨ Chinaki Pain, ⑩ Khwajagi, ⑪ Kamangar, ⑫ Aziz Khel, ⑬ Ibrahim Khan
(USDA Map および *Карта Афганистана* を参考に作成)

地図 3 パルワーン近辺の村落分布図

15) 1885 年のいわゆる「パンジエデフ危機 (Panjdeh Crisis)」を承け、ロシアとアフガニスタンの国境を画定するために設置された同委員会については Holdich 1901: 123-179 を参照。

16) ちなみに現在の地図上で計測すると、ベグラーム遺跡からジャバル・アッシラージまで直線距離で 9 マイル。方向は北から西へ約 27 度である。

クシュの山際にあったと考えてよい¹⁷⁾。

4 前近代のパルワーン

19世紀以前に遡ると、しかしながらパルワーンに関する言及は管見の及ぶ限り多くはない。14世紀、大旅行家イブン・バットゥータ (Ibn Baṭṭūta) はアンダラーブからハワーク峠を越えてパンジヒールを経てパルワーンに至った。そこにはチャガタイ・ハンのタルマシーリーン (Tarmashīrin) の総督ブルンタイ (Burunṭayh) が駐留し、北からカーブルやガズニを監督していた [家島 1999: 216]。13世紀、イラン高原を逐われたホラズムシャー・ジャラールアッディーン (Jalāl al-Dīn) はガズニにいたゴール朝系の軍勢と合流し、追撃してきたモンゴルのシキ・クトゥク・ノヤン (Siqi Qutuq Noyan) 率いる軍とパルワーンで戦い打ち破っている [稲葉 2004: 326-7]¹⁸⁾。

残念ながらこれからは、パルワーンがヒンドゥークシュ南側にあったことはわかるものの、より具体的にコー・ダーマン平原のどこに位置していたのかは明確にはならない。しかしながらさらに時代を遡ると、我々はそれを解明する手掛かりとなる記録を見出す。すなわち11世紀のバイハキー (Abū al-Faḍl Bayhaqī) の年代記に以下のように見えるのである。

アミール (マスウード Mas'ūd) はカーブルを發ち、パルワーンに着いた。狩りをしたり酒盛りをしたりしながら、荷物や装備、象がゲーザク (Ghūzak) 峠を越えてしまうまで、そこに5日間滞在した。それから彼自身もその峠を越え、チューガーニー (Chūghānī) で酒を飲んだ。[Bayhaqī: 378; Bosworth & Ashtiany 2011: I, 398]

アミールはこの手紙に落ち着きを失い、次のような返信をするよう命じた：私はもう出發した。ゲーザク峠の道を通って進むであろう。ワズィールはバグラーン (Baghlān) へ、そしてそこからアンダラーブへやってきて、チューガーニーの宿駅で我々と合流すべし。この手紙は早馬の *Khayltāsh* によって送られた。アミールは道を急ぎ、パルワーンに一日だけ留まってゲーザク峠を越えた。チューガーニーに着くと、荷物や装備、武器、象と軍勢とが到着するまで数日滞在した。[Bayhaqī: 738; Bosworth & Ashtiany 2011: II, 238-39]

前者は422年シャッワール月 (1031年10月)、後者は430年ムハッラム月 (1038年10月) のことである。ここに登場するチューガーニーは、アンダラーブ川沿い、それがスルハーブ川と合流するドシ (Doshi) のやや東にあるヒンジャーン (Khinjān) に隣接する村の名

17) 前述のマッソン蒐集にかかるベグラーム貨幣の中にパルワーン発行ムスリム貨が含まれている背景については、Indian Office Library のマッソン関連文書を調査したエリントン (E. Errington) 博士より、マッソンがベグラーム由来としてまとめたもののなかに、かなりの数、彼が現地民に依頼して購入したものが含まれていた可能性があるとのことご教示をいただいた。確かにマッソン自身パルワーンから多くの貨幣が出ているとも記している [Masson 1842: III, 166]。

18) ただし、このパルワーンはここで問題にしているパルワーンとは別の場所であるというラヴァーティー (H. G. Raverty) の説がある [cf. Minorsky 1970: 348]。

前として現在も地図上 (*Карта Афганистана*, USDMA Map など) に見え、サラング (Salang) 峠を越えるハイウェイのアンダラブ側の入り口にあたる場所である。それゆえパルワーンからチューガーニーへと峠を越えたというバイハキーの記述は、ガズナ朝のスルタンが今のサラング峠 (あるいはその東側の Bajgah 峠) を越えて北に出たことを示している。そうしてこの道の南側の登り口にパルワーンがあるという 19 世紀の記録とこの 11 世紀の記録は整合する。当然バイハキーの言及する「グーザク峠」もこの二つの峠のどちらかにあたる筈である¹⁹⁾。したがって 11 世紀のパルワーンは 19 世紀のパルワーンとほぼ同じ場所にあったのであり、当然ジャラルール・アッディーンとモンゴル軍が戦った場所、タルマシーリーの総督が駐屯していた場所もサラング川峡谷の入り口だったと考えて良い。同じく 11 世紀の大学者ビールーニー (Abū Rayḥān al-Bīrūnī) の

Kāyabish すなわちカーブルの王国の近くの山から川が流れ出ている。それはその多くの支流とともに、ゴールバンドと呼ばれる。グーザク峠 [から流れ出る川の] 水と、パンジヒールの諸支流の水とがパルワーンの下手でそこに合流する。[Bīrūnī: 192; Sachau 1888: II, 259]

という記述も上記の同定を支持するだろう。現在の川の流路を見るなら、ゴールバンドはまずジャバル・アッシラージの南でサラング川と合流し、次いでベグラーム遺跡のある場所でパンジヒールの本流と合流するのであって、ビールーニーの言うグーザク峠から流れ下る川がサラング川にあたることは疑いがなく、しかもその合流点の北側にパルワーンはなければならないのである。

5 ヒンドゥークシュ越のルート

ところで、バイハキーの記述が明らかにするのは、11 世紀当時ヒンドゥークシュを越えるルートとして最も直線的なサラング川沿いルートが用いられていたことである。ムガル朝の祖バーブル (Zaḥīr al-Dīn Muḥammad Bābur) は 16 世紀初頭、ヒンドゥークシュを越える 7 つの峠の存在を記録している。

カーブル地方は堅固な地方である。外敵がこの地方に侵入する事は困難である。バルフ、クンドゥズ、バダフシャーとカーブルの間にはヒンドゥークシュ山脈がある。この山脈を 7 つの交通路が越えている。

この内の 3 道はパンジヒールにある。より上方にあるのがハワーク峠である。それよ

19) ボズワースはこの峠を、同じくガズナ朝時代に書かれたウトッピー (al-'Utbi) のアラビア語年代記 *Kitāb al-Yamīnī* に、ヒンドゥークシャー・ジャイパール (Jaypāl) とセビユクテギンが戦った場所として現れる “aqabat ghūzak” と同じものかと注記している [Bosworth & Ashtiany 2011: III, 182]。確かに “aqabat ghūzak” は「グーザクの峠」であり、名称としては同一だが、それがヒンドゥークシュ越えの峠であるなら、戦場、とりわけガンダーラ方面のヒンドゥークシャーとガズニの軍勢の間の戦いの場となったとは考えにくい。

り下方にあるのがトゥールで、さらに下方にあるのがバーザーラクである。この3つの峠の内でもよいのがトゥールである。しかし道のりがややより遠い。おそらくこのために「トゥール」と呼ばれる。最も直線的なのがバーザーラクである。トゥールとバーザーラクはサラーブにあり。サラーブの人々は、バーザーラク峠が、パーランディーという村にありるので、それをパーランディー峠と呼んでいる。

もう1つはパルワーン道である。大峠とパルワーン間にさらに7つの峠があるため、ハフト・バッチャと呼んでいる。アンダラブ方面から2つの道が来て、大峠の麓の所で合流し、ハフト・バッチャ峠を経てパルワーンに向かっている。まことに危険に満ちた道である。

さらに3道がゴールバンドにある。パルワーン道により近い道がヤンギ・ヨル峠である。ワリーアーンとヒンジャンンにあり。別の1道がキプチャク峠である。アンダラブ川とクズル・スーの合流点にあり。この道もよい道である。

別の1道がシバルトゥ峠である。夏、水量が増すと、人々はシバルトゥ峠を越えて、バーミヤーン、サイカーンを経て進む。……[間野 1998: 203-204]

ここにあげられる7つの峠のうちハワーク峠はパンジシール川上流から山を越える峠で現在も地図に見える。またシバルトゥ峠はシバル峠で、ゴールバンド溪谷とその西側との境界となっている。バーザーラク (Bāzarak) 峠は北側のサラーブ (Sarāb) に下る道の峠で、その道はパーランディー (Pārāndī) 村を通過するというから、その名の通り現在のパーランデフ (Pārāndeh) 峠にあたる [cf. RIP-ABC: V, 314-5]。この峠のパンジシール溪谷側にはバーザーラクというまちが今もある。この2つの間にあったはずのトゥール峠の場所ははっきりとはしないが、位置関係からみて、ハワーク峠のすぐ南に位置する Til 峠、あるいはその西に位置する Zurya 峠のどちらかではなかろうか [cf. Adaemc 1985: 633]。「大峠 (ulūq kūtāl)」は、アンダラブから来る2本の道がその麓で合流するとされ、現在のサラング峠か、その東側にあるバージュガーフ峠にあたるであろう。ヤンギ・ヨル峠はニマカオ (Nimakao) 川上流のワリーヤーン (Wāliyān) とヒンジャンンへと降りていく道の峠であるとされるので、サラング峠の西側に位置するヒンドウクシュ (ワリーヤーン) 峠、キプチャク峠はアンダラブとキジル・スー (=スルハープ) の合流点、つまり現在のドシに向かう道の峠だと書かれているので、今のチャハールダル (Chahārdar) 峠にあたる²⁰⁾。それぞれのおおまかな位置は地図に書き込んだが、ようするに、ヒンドウクシュ山脈南麓をパンジシール溪谷とゴールバンド溪谷の東西2つの谷に分け、前者から山越えをするのが、最初の3つの峠、後者から山越えをするのが後の3つの峠、そうしてその真ん中に位置するの

20) 前出のピーコック大尉は、ランガの近くでゴールバンド本流に合流する Deh Tang 川沿いの峡谷を Dara Kipchaq と呼び、それを遡るとチャハールダル峠に至ると記している [RIP-ABC: III, 419]。パブルがキプチャク峠と呼んだ場所が現在のチャハールダル峠にあたることはほぼ間違いないだろう。

が「大峠」、つまりサラング川を遡るルートだったのである。前節最後に引いたバイハキーの記述に見える「ゲーザク峠」とパーブルの記す「大峠」もほぼ同じ場所、つまりサラング峠かその東に隣接するバージュガーフ峠を指していると考えてよい（地図 1 参照²¹⁾。

いずれにせよ、パーブルの時代、ヒンドゥークシュをパンジシール渓谷、ゴールバンド渓谷、およびその中間の 3 つのルートで越えることが一般的であったことがここからわかる。ではそれぞれのルートは 16 世紀以前どのように用いられたのであろうか。残念ながらここでも文献資料はきわめてわずかな情報しか与えてくれないが、それでも管見の及ぶ限りにおいて以下の事例を確認することができる。

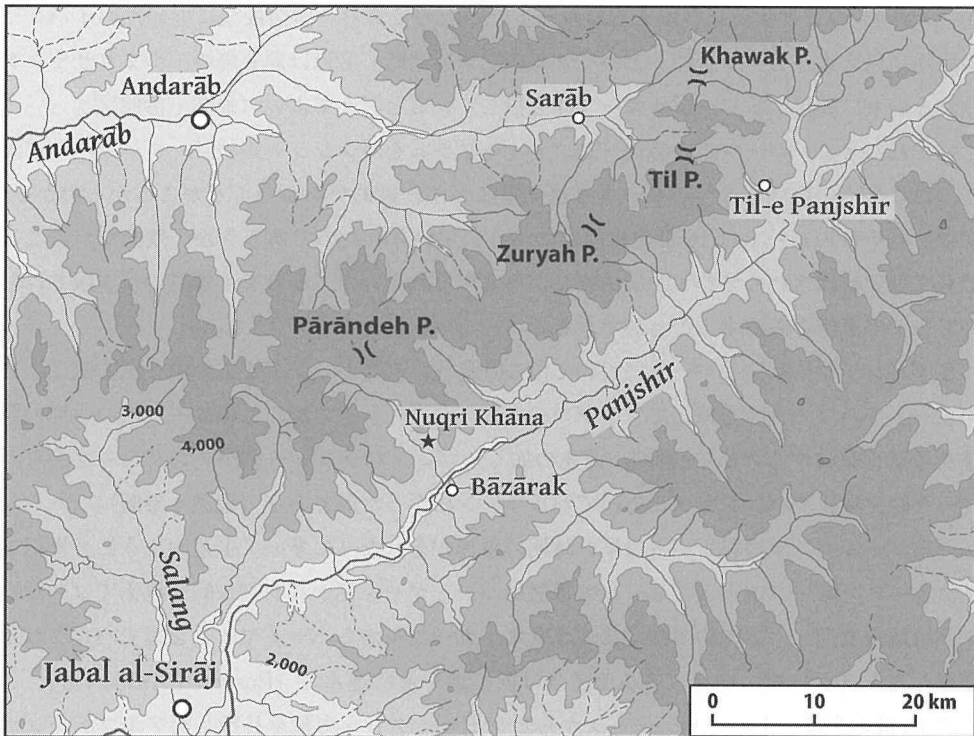
まずパンジシール渓谷ルートについては 640 年代、玄奘がインドから中国へ戻る際に、このルートでハワーク峠を越えてアンダラブに下った²²⁾。その次にこのルートについての明確な言及を眼にするのは 14 世紀、前述の如くイブン・バトゥータがアンダラブからハワーク峠を越えてパンジシールを経てパルワーンに至った際である（地図 4 参照）。

一方ゴールバンド渓谷ルートは早い時期の事例がそれなりに多い。上述のように 8 世紀末、イブラーヒーム・ブン・ジブリールの軍勢はバーミヤーン側からシバル峠を越えてゴールバンド流域を東進し、その約 100 年後の 870 年、カーブルからバーミヤーンを経てバルフへと進軍したヤアクーブ・ブン・アルライスは同じ道を逆に進んだ [Bosworth 1994: 107]。さらに 10 世紀半ば、トハリスターンからヒンドゥークシュ南麓を目指したアルプテギンはやはりバーミヤーンからカーブルへ進軍した際このルートを用いている。

最後に中間のサラング越えルートについては、残念ながら 11 世紀のガズナ朝のスルタンの事例しか知られていない。フスマンは上掲のパーブルの記述に言及しつつ、ソヴィエトによってサラング・トンネルが掘削され舗装された道が敷かれる以前、この峠を越える道が頻繁に用いられたとは信じがたいと記している [Fussman 2008: 174]。確かに上掲のバイハキーの記述に見える 430 年の峠越えは、アム河北岸からトハリスターンへと侵攻しつつあったカラ・ハン朝のビョリ・テギン (Böri Tegin) の軍勢を迎え撃つために可能な限り急

21) ちなみに 17 世紀の 'Ā'im-e Akbari はヒンドゥークシュ越えの峠道について、パーブルの記述をほぼそのまま踏襲している [Abū al-Faḍl: I, 592; Jarrett 1978: II, 407-9]。

22) 玄奘がこの時越えた峠がどこであったのかという点は従来十分に検討されてはこなかった。『大唐西域記』に見える峠「婆羅犀那大嶺」をハワーク峠にあてたのは、19 世紀のヒンドゥークシュ越えの状況からの類推に過ぎない。もちろん、前述のゲーザク峠とサラング/バージュガーフ峠の例のように、同峠が 7 世紀に別の名前で呼ばれていた可能性は大いにあるとはいえ、「婆羅犀那」は、たとえそれが玄奘による地名の「サンスクリット語化」[cf. 桑山編 1992a: 136-139] の結果だとしてもハワークと共通する要素を持つようには見えない。しかしながら玄奘が記録する峠越えの日数を考えれば、この同定にはそれなりの正当性が賦与できるようにも思われる。すなわち、玄奘はカーピシーの辺境のむらから 3 日で峠に到達し、そこから 3 日かけてアンダラブに下っている。この行程数は、後述のアラビア語地理書に見える旅程、すなわちアンダラブから 3 日でジャールバーヤ、そこから 1 日でパンジヒール、さらに 2 日でパルワーン、というものとよく対応しているのである。ただし、後注 25) にあるように、アラビア語地理書の言うジャールバーヤ、パンジヒールがどこにあったかは確定できない。



地図4 パンジシール川流域

いで山越えを図ったもので、ある意味で緊急事態に応じたルート選択であったのかもしれない。しかし422年の例はサマルカンド (Samarqand) にいた同じくカラ・ハン朝のアリー・テギン (‘Ali Tegin) を牽制するためにバルフ (Balkh) 方面を巡察する目的の旅であり、それほど緊急性の高いものではなかった。それにもかかわらずスルタンの一行がこのルートを選んだのは、やはり当時このルートで峠を越えるのが珍しくはなかったことの証であろうし、必要とあれば軍勢、しかも象を含む軍勢が越えることができた峠がマイナーなルートであったとは考えにくい。

以上、11世紀以前におけるバルワーンの位置とヒンドウクシュ越えルートについて考察したが、これらの状況がガズナ朝以前のヒンドウクシュ南麓の状況とどう関連するかを次に考えてみたい。

IV ヒンドウクシュ南麓のムスリム貨幣

1 初期のムスリム貨幣の発行地

最初に述べたように、660年頃スイスターンから北上したアラブ軍により一旦カーブルおよびザブリスターンが降伏した後、これら両地はカーブルシャーおよびその分家である

ルトビールの王国によって奪還され、その後約200年間現在のアフガニスタン東部は非ムスリムの支配する地であった。ただし、上述の8世紀末のムスリム軍の遠征を契機として、ヒンドゥークシュ南麓の政治情勢自体には大きな変化があったらしい。ラフマンは北西インドに残るヒンドゥーシャー朝時代の碑文を検討した結果、それらの碑文に見える紀年が西暦の822年に始まるものであることを明らかにし、この年次をヒンドゥーシャー朝の成立年代とみなした [Rahman 1993; 1998]。そうして、この地域におけるテュルクシャー朝からヒンドゥーシャー朝への政権交代の背景として、アッバース朝カリフ、マームーン (al-Māmūn) 時代の814-15年に行われたとされる遠征をあげる [cf. Ghafur 1965-66]。アッバース朝軍に降伏し、課税を受け入れたテュルクシャーに対して背いて王位を奪ったのがヒンドゥーシャー朝だったとするのである。前述の如くこの遠征に先立ち、8世紀末にカーブルシャーの王国はムスリムの侵略を受けている²³⁾。そのような度重なる侵攻の結果、9世紀の20年代頃にテュルクシャーの王権が随分と不安定になっていた可能性は高く、ラフマンの説は十分説得的であると思われる²⁴⁾。

しかしそれでもヒンドゥークシュ南麓からアフガニスタン東部がムスリムの恒久的支配の域外にあったのは間違いない。その状況が大きく変化するのは860年代、スイスターンで自立したサッフアル朝のヤアクーブがルトビールの王国を滅ぼし、カーブルシャーからカーブルを奪ったときである。サッフアル朝の遠征の詳細や、この両地をどのように統治したのかについては、筆者もかつて簡単に述べたことがあるし、より詳しくはボズワースによって描写されている [Bosworth 1994: 83-135]。カーブルを征服したヤアクーブは873年パンジヒールの地で自らの貨幣を発行した。これは現在まで知られているところでは、ヒンドゥークシュ南麓でつくられた最初のムスリム貨幣であった。パンジヒールは現在のパンジシール川流域にあったまちで、イスタフリーやムカッタスィーは、アンダラープから3日でジャールバーヤ (Jārbāya)、そこから1日でパンジヒールに着き、さらに川沿いに2日下るとパルワーンに到達すると記している [Iṣṭakhri: 286; Muqaddasi: 346]。銀山に隣接し、銀鉱石を扱う者達の住処であった²⁵⁾。これとほぼ同じ頃、ヒンドゥークシュの

23) 注4) で述べたように、もし仮にボズワースにならって787-88年のアッバース・ブン・ジャアファルの遠征を独立のものと考え、さらに795年以降、イブラーヒームが南方からカーブル遠征を行ったと想定するなら、8世紀末、カーブルシャーの王国は短期間に少なくとも三度もの軍事遠征を受けたことになる。

24) なお、ラフマンは、822年ヒンドゥーシャー朝が成立したときに、テュルクシャー朝最後の王 Lagatūrmān が廃位されたのだとするが、一方でヒンドゥーシャー朝の王家が、従来言われていたようなカシミール出身のパラモンではなく、ガンダーラに古くからいた土着の有力者 Oḍi/Uḍi 家に由来すると考えている [Rahman 2005]。そもそもカーブルに拠点置いていたテュルクシャー朝に対し、ヒンドゥーシャー朝がハイバル峠の東側から勢力を伸ばしたのだとすれば、二つの王朝がある時期併存していた可能性もあるだろう。

25) このまちが現在のどこにあたるのかはわかっていない。ちなみにパンジシール川の流域で現在まで知られている銀鉱の跡 (Nuqri Khāna) はバーザーラク北側の山中にある [Ball 1982: I, 195]。

反対側、アンダラブではバニージュール (Banijūr) 家あるいはアブー・ダーウド (Abū Dā'ud) 家としても知られるバダフシャー (Badakhshān) のアミール達が銀貨を発行している²⁶⁾。バニージュール家は 873 年には山脈の南側パンジヒールでも貨幣を発行した。バニージュール家のパンジヒール貨幣はその後 906 年までつくられたが、その間パンジヒールではアッパース朝カリフの名を刻んだ貨幣もつくられている。しかしそれらも実質的にはバニージュール家による発行であったのだろう [cf. Bacharach 1976: 147]。905 年になるとパンジヒールではサーマーン朝の貨幣が発行される。パンジヒールにおけるサーマーン朝貨幣はその後 950 年頃までつくられたらしい。9 世紀後半から 10 世紀前半のパンジヒール貨幣の、特にその金型 (die) について論じたトレッドウェル (L. Treadwell) は、金型制作者のサインが附された珍しいタイプの貨幣がパンジヒールで発行されていることに着目し、9 世紀末にアンダラブで金型をつくっていた職人が 10 世紀になるとパンジヒールに移動して同じ作業をしていたと考えた。この職人が拠点を移した理由はよくわからないが、少なくともアンダラブとパンジヒールを結ぶ人や物のある程度の流れが存在したことをこの事実は明白に物語っている [Treadwell 2009: 40-52]。さらにそのような山脈南北の連絡にバニージュール家が一時期大きく関与していたのは間違いないだろう。

一方パンジヒールのサーマーン朝貨からやや遅れてパルワーンとバーミヤーンでもサーマーン朝のアミールの名を刻んだ貨幣が発行されている。パルワーンではその後 960 年頃まで、バーミヤーンの貨幣は例は少ないものの、やはり同じ頃まで発行されている [cf. Mitchiner 1973: 122-124]。要するに 10 世紀前半、サーマーン朝はパンジヒール、パルワーン、バーミヤーンにおいて貨幣を発行したのであり、これらは前節で確認したヒンドゥークシュ越えの当時の三つの主要ルート上に位置するまちなのである。

2 バーミヤーンとパンジヒール

ではサーマーン朝はこれらのまちなち、すなわちヒンドゥークシュ山脈南麓を 10 世紀前半の時点において支配していたと言えるのだろうか？

イスマーイール (Ismā'īl b. Aḥmad) 以来サーマーン朝の領土はサーマーン家の直轄領と属国とで構成されていた [Frye 1975: 138, 148-49]。トハーリスターン以南は基本的に後者に属したと考えられるが、残念ながら我々はサーマーン朝がヒンドゥークシュ南麓どころかトハーリスターンにおいてすらどのような統治、とりわけそれぞれの土着の小領主達とどん

26) バニージュール家については Vasmer 1925; Bacharach 1976 参照。シュヴァルツ (F. Schwarz) はしかしこの名称をとらず、"Amire in Badaḥshān" と呼んでいる [Schwarz 2002: 7; cf. Treadwell 2009: 37, n. 70]。一方バニージュール家がいつからアンダラブで貨幣を発行し始めたかは正確にはわからない。ファスマー (R. Vasmer) がバニージュール家のアンダラブでの貨幣製造を、彼らがパルフやパンジヒールで貨幣を発行した始めたのと同じ時期に遡らせる [Vasmer 1925: 51] のに対し、バカラック (J. L. Bacharach) は確実な最も古い貨幣は 883 年のものだとしている [Bacharach 1976: 148]。

な関係を結んでいたのかについて十分な情報を持っていない²⁷⁾。それでもバニージュール家がサーマーン朝の宗主権のもと、ある程度自領において統治権を行使したと見てもそう大きく過たないだろう。760年代から770年代におそらくはマドル (Madr) の地で作成されたであろうアラビア語文書では、バーミヤーンの民がマドルにいたアッバース朝のアミールに税金を納めていたことがわかるが、ほぼ同時期のバクトリア語文書は、同じ地域の民が訴訟関連の事柄についてはカダグスタンの支配者のもとに案件を持ち込んでいたことが知れる²⁸⁾。ハーン (G. Khan) はこのことから、徴税をムスリムが、それ以外の係争事や司法判断を土着の領主達が行うという重層的支配構造が8世紀後半のトハーリスターンに存在していたことを指摘しているが、その関係は基本的にサーマーン朝のもとでも同じだったのではなかろうか²⁹⁾。ちなみにバカラックは、アンダラップ発行の貨幣に見える発行者の名前と上位勢力の君主の名前のあり方から、アンダラップについては、まずサイド・ブン・サイドの家系の支配があって、そこにバニージュール家が被さり、サッフアール朝、次いでサーマーン朝がさらにその上に乗って、バニージュール家が後者の総督としてまちを統治したという構造を想定している [Bacharach 1976: 149]。この場合、実態がほとんどわからないサイド家がアンダラップ近辺の地方領主、バニージュール家がトハーリスターンにある程度広域に影響下に置いた中規模の勢力、そしてサッフアール朝、サーマーン朝はより強大な広域国家ということになるのだろう。しかしこのことに関して、バーミヤーンとパルワーン、パンジヒールを同列に考えて良いのかどうかは判断が難しい。

バーミヤーンがイスラーム時代以前から独自の王を戴いていたことは中国側資料からも、あるいは初期のアラビア語資料からもわかる。王は *shīr* と呼ばれ、これが中世イラン語形 **xšaθriya* に由来するもので、同時代のガルチスターン (Gharchistān) の王 *shār* や、ローブの王 *khār* が同じ称号の地域的ヴァリエーションであることは夙に知られている [Marquart 1901: 79, 92; Sims-Williams 2000: 231]。8世紀末イブラーヒームの遠征軍に参加したバーミヤーン王ハサンも *shīr* と呼ばれており、なにより10世紀半ば、アルプテギンがバーミヤーンの支配者と戦った際、この王はやはり *shīr* と呼ばれていたことから [稲葉 1994: 234 参照]、同じ王家の系統に属するかどうかは別として、バーミヤーンに在地の王が居続けたこと、そしてその王が *shīr* と呼ばれていたことは間違いない。そのような状況下サーマー

27) ただし、アム河北岸のチャガーニヤーン (Chaghāniyān=スルハンダリヤ流域) については、同地の地方領主とサーマーン朝の関係を論じた Bosworth 1981 がある。

28) カダグスタンについては宮本 2012 を参照。

29) Khan 2007: 19 参照。ただし例えばバーミヤーンの王が自らの領土からあがる税収を全てムスリムに徴収させていたとは考えにくいので、民の側からすれば二重、三重に税を支払わねばならなかったのだろう。このことは、748年に作成されたバクトリア語文書に、Gandarの地の民がアラブから重い税を課せられていたこと、さらにそこにテュルクや、バーミヤーン、ローブの領主などなどが干渉してくる可能性があったことが記されていることから傍証されよう [cf. Sims-Williams 2000: 126-135]。

ン朝アミールの貨幣がバーミヤーンでつくられたということは、この地域がサーマーン朝の宗主権下に入ったことを示す。筆者が確認できたところではサーマーン朝のナスル 2 世 (Naṣr b. Aḥmad 在位 914-43) 治世のおそらく 327/939-940 年発行のものが最も古いが、ディレル (Ö. Diller) が引用するミッチナー (M. Mitchner) のリストによればさらに古く 292/905-6 年にまで遡るらしい [Diller 2009: I, 233]。そうだとすれば、これもイスマエールのサッフール朝に対する勝利の影響としてバーミヤーンがサーマーン朝に服属したことを示し、さらにナスルの治世においてサーマーン朝の直接、間接の領域内で貨幣形式の統合が行われた際に、バーミヤーンでもあらためてサーマーン朝式貨幣が発行されたことに対応するのだろう [cf. Treadwell 2009: 42]。

一方パンジヒールのまちの有様についてはトレッドウェルが詳細に論じている。そこで彼は、ヤークウト (Yāqūt) の地理学事典 *Muʿjam al-Buldān* およびハムダーニー (al-Hamdānī) の *Kitāb al-Jawharatayn al-ʿatīqatayn al-māʿiʿatayn al-ṣafrāʾ wal-baiḍāʾ* (942 頃) に見えるパンジヒール鉱山の様子をひきつつ、この鉱山が荒くれ者達が一攫千金を求めて穴を掘りまくる場所であったこと、掘り出された銀鉱石は三等分され、3分の1を政府の代理人が、3分の1を鉱夫が、残りの3分の1をまちの住民がとり、後者については商人に売り渡されたことなどを明らかにしている³⁰⁾。このような状況を勘案するなら、パンジヒールで発行された貨幣がそのままこの地をどれかの政権が掌握したことを示す、というような単純な話ではなかったことがわかる。パンジヒールにおいては 261/874-75 年にサッフール朝の貨幣とバニージュール家の貨幣がともに発行されている。2年後の 263/876-77 年とその翌年にはアッバース朝カリフの名を刻んだ貨幣とバニージュール家の貨幣がともに発行され、その後もアッバース朝貨幣とバニージュール貨幣が交互に発行され続け、最後に 292/904-05 年にサーマーン朝貨幣とバニージュール家の貨幣が同時に発行されたが、このような状況は、このまちがある政権のもとでしっかりとコントロールされた造幣場所というわけではなかったことを示しているのだろう³¹⁾。ただそれも、915-19 年にかけてパンジヒールから、当時サーマーン朝のホラーサーン総督であった Aḥmad b. Sahl の名を刻んだ貨幣が発行されたのを契機に変化したらしい。この貨幣は 914 年に行われたと覚しきサーマーン朝による貨幣金型統一の結果であり、その意味でこの時期以降同地に対するサーマーン朝

30) さらにトレッドウェルは同時期にパンジヒールから発行されたと覚しき三種の貨幣、すなわち造幣地名が Panjshir, maʿdin, Askar Panjshir となっているそれぞれが、この三種のグループと関連するのではないかと示唆している [Treadwell 2009: 50]。

31) シュヴァルツはパンジヒールの貨幣に刻まれるのがカリフ、あるいはサーマーン家のアミールのものであったり、バニージュール家とおぼしき人物の名がともに刻まれたりと安定しなかったのは、当該貨幣の発行に関わる人物が固定されてなかったためではないかと示唆している [Schwarz 1995: 6]。バカラックはアンダラップについて同様の事態があったことを、当該地域を実効支配していた地方領主 (例えばバニージュール家) の勢力の強弱を反映しているのかもしれない、と述べる [Bacharach 1976: 147]。

の統制がそれ以前に比較して強まったと想像できる [Schwarz 1995: 7, 24; Treadwell 2009: 42, 51]³²⁾。

3 サーマーン朝とパルワーン

さてそれではパルワーンはどのようなのであろうか？ パルワーンで 334/945-46 年と、365/975-76 年に発行された 2 種の貨幣のうち、前者にはサーマーン朝のヌーフ 1 世 (Nūh b. Naṣr 位 943-954) の総督アフマド・ブン・ユースフ (Aḥmad b. Yūsuf) なる人物の名が刻まれ、後者には同じくサーマーン朝のマンスール 1 世 (Maṣṣūr b. Nūh 位 961-976) の総督ナスル・ブン・アフマド (Amīr Naṣr b. Aḥmad) の名が刻まれている [Schwarz 1995: 64]。名前から判断して前者のアフマドと後者のナスルは親子であったと思われるが、これがバーミヤーン王のようにサーマーン朝の宗主権下にあった在地の勢力なのか、あるいはブハラ (Bukhārā) から派遣されたサーマーン朝直属の総督であったのかは、残念ながら不明である³³⁾。

1040 年、ガズナ朝がダンダーナカーン (Dandānaqān) でセルジューク軍に破れ、マスウッドが敗走してガズニに戻った後、彼は王子マウドード (Mawdūd) に軍勢をつけて、北方防衛のためにフプヤーン (Hupyān) とパルワーンに派遣した [Bayhaqī: 882-3; cf. Bosworth & Ashtiany 2011: II, 353-54]。フプヤーンがチャーリーカルの北方のオピアン (Opian/Opiān-e Sharif) にあたることはすでにスタイン (A. Stein) やハビービー ('A. H. Habībī) が論じたところであるが [稲葉 1990: 646-652 参照]、上述のようにサラング溪谷の入り口に位置したパルワーンもまた、ヒンドークシュを越えてやってくるかも知れない

32) なおコーウェル (M. R. Cowell) とロウィック (N. M. Lowick) による、原子吸光分光法を用いた 10 世紀初頭のムスリム銀貨の成分分析は、バンジヒール銀山で産出された銀鉱石がトハリストーンおよびヒンドークシュ南麓の造幣地において用いられていたことを明らかにしている。一部で言われていたようにバンジヒールの銀がイラン高原西部やイラクにまでもたらされたという事実は確認できなかったと言う [Cowell & Lowick 1988]。

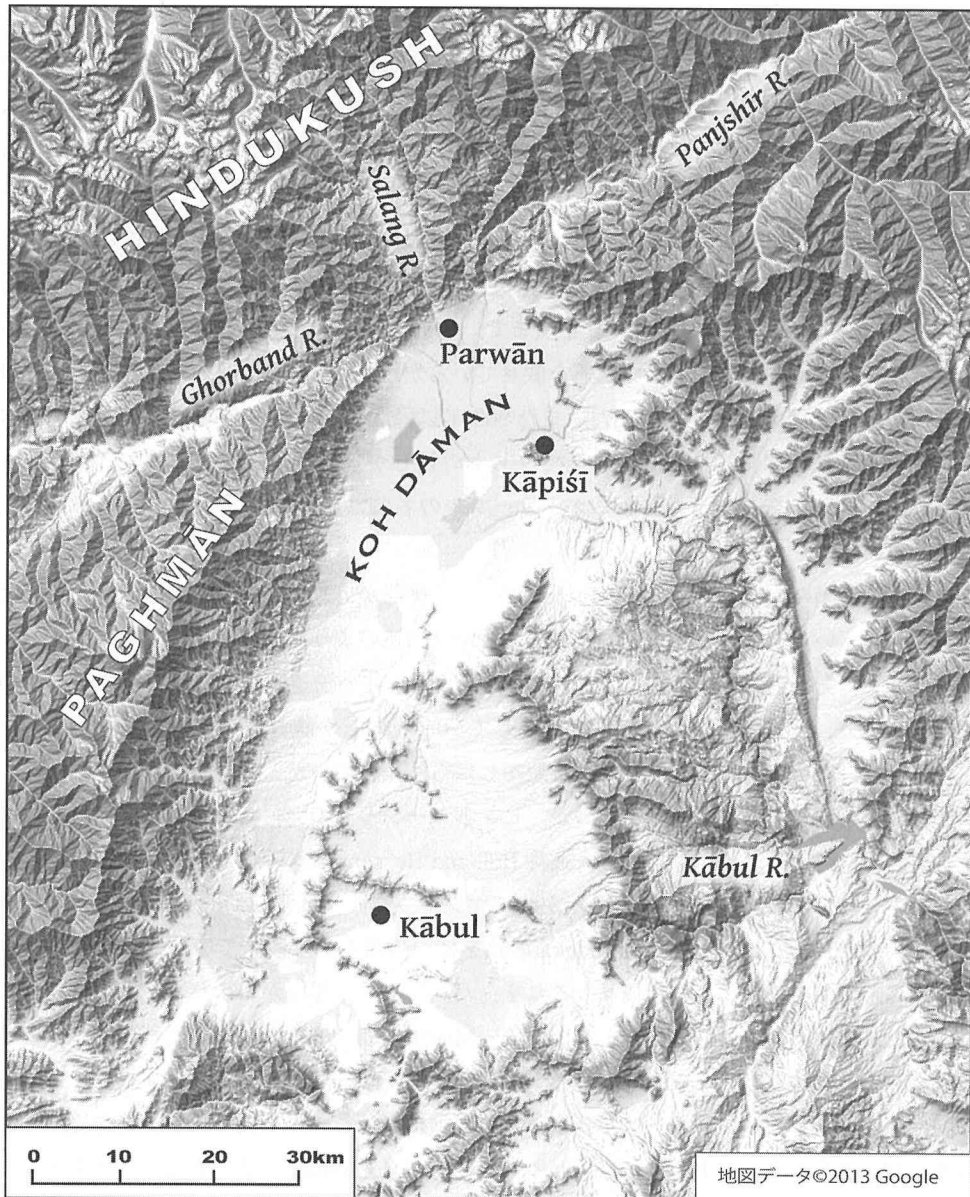
33) ただし 975-76 年パルワーン発行の貨幣に “min mā' amara bihi al-amīr Naṣr b. Aḥmad Maulā amīr al-mu'minīn” と刻まれているのは興味深い。ここに見えるナスル・ブン・アフマドがサーマーン朝の同名のアミール、すなわちナスル二世ではないということについてはすでにシュヴァルツ [1995: 64, n. 12] が注記しているが、刻文の内容から見て、サーマーン朝のアミールではないところのナスルが、信徒の長のマウラーと名乗り、amīr の称号を冠して貨幣を出しているのである (ただし同貨幣にはサーマーン朝のマンスール一世 (Maṣṣūr b. Nūh, 位 961-976) の名前も刻まれている)。サーマーン朝時代、amīr の称号は通常サーマーン家の成員が名乗っており、家臣筋の者達は amīr と呼ばれることはなかった。ガズナ朝の初代セビュクテギン (Sebūk Tegin) が生涯 amīr ではなく ḥājib と名乗っていたことはよく知られている [稲葉 1988 参照]。ただし、セビュクテギンを amīr と呼んでいると覚しき Ma'dīn Panjshīr 発行貨幣も存在する [Mitchner 1973: 88]。このことから類推するなら、amīr と名乗ったナスル・ブン・アフマドがサーマーン朝に服属していた地方領主である可能性はあるかもしれない。ただし、サーマーン朝支配下で貨幣に名を刻まれた者達のうち、誰がサーマーン家直属の家臣で、誰が属国の領主であったのかを区別するのはしばしば困難である [Cf. Hennequin 1970: 154-55]。

敵に対して防衛拠点とするにふさわしい場所だった。地理的にバルワーンはコー・ダーマン平原およびその南側（カーブル、ガズニなど）にとって、北からの脅威に対する防衛拠点となるべき場所だったのであり、そのことは地形図からも簡単に看取できる。しかしそのパターンから外れる情報を我々は1つ持っている。すなわち上に引いたイブン・バットウータの記述である。ヒンドゥークシュの北側から南側への統治を試みていたタルマシーリーの総督ブルンタイは、カーブルあるいはガズニに入ってそこを拠点とすることなく、バルワーンに駐屯していた。この場合はバルワーンが北の勢力にとっての南に対する橋頭堡となっていたのである。もちろん地理的軍事的にこれが成立するための条件は、バルワーンがなんらかの形で山脈の北側と緊密な連絡を持っているということであり、そのためにはヒンドゥークシュ越えのルートがバルワーンをおさえた勢力のコントロールのもとにあることが必要となる。チャガタイ・ハンの統治とヒンドゥークシュ越えの主要ルートの関係は残念ながら不明だが、サーマーン朝の場合この条件をある程度備えていたのではなかろうか。すなわち、ゴールバンド渓谷ルートはバーミヤーンがサーマーン朝の影響下にある限り確保される。またパンジシール渓谷ルートも、バニージュール家の介在はあったかもしれないが、サーマーン朝の利用が可能な状態にあった。そうして最後の、最も直線的ルートであるサラング峠越えは、もしそれがガズナ朝のマスウードの時代より1世紀弱遡る10世紀前半にも頻繁に利用されていたのであれば、バルワーンの後方支援のために利用されたであろうし、もし利用されてなかったとしても、ゴールバンド、パンジシール両渓谷をおさえることで、バルワーンを東西から支えることができたということになる。

いずれにせよ、上述のような情報は断片的ではあるが、10世紀前半ヒンドゥークシュ山脈の南の山裾がサーマーン朝の（直接であれ、間接であれ）影響下にあったことを示していると見てよい。

V ガズナ朝以前のコー・ダーマン平原

しかしこのような事実は、従来我々が持っていた10世紀前半のヒンドゥークシュ南側の状況に関する理解とは異なるものである。なによりも問題はヒンドゥーシャーがいつ頃カーブルを奪回したかという点である。筆者はかつて『スイースターン史』等の記述を手掛かりに、カーブルがヒンドゥーシャーによって奪還されたのは10世紀初のことではないか、と述べたことがある〔稲葉1994: 236-7〕。しかし前節で述べたような貨幣の発行状況を鑑み、またカーブルとヒンドゥークシュ南麓の距離および地勢をはかるなら、パンジヒールやバルワーンでサーマーン朝の貨幣が発行されていた間、カーブルがヒンドゥーシャーの手にあったと考えるのは確かである。実際アラム（M. Alram）は、パンジヒールでサーマーン朝が貨幣を発行し始めて以降、カーブルはずっとムスリムの支配下にあったと見なした方が理解しやすい、と筆者に述べたことがある（地図5参照）。しかしながらこの考えにも難



地図5 カーピシー/カーブル地勢図 (Google Map 地形図をもとに作成)

点はある。第一に、もしそれまで200年ほどヒンドークシュ南側の政治の中心であったカーブルがサーマーン朝の統治下に入ったとすれば、サーマーン朝の貨幣は他ならぬカーブルで発行されるべきと思われるが、我々はそのような貨幣を1例たりとも知らない。もちろん今後見つかる可能性はあるかもしれないが、現在まで知られているパルワーンやパンジヒール貨幣がそれなりの量のものであることを勘案するなら、それはあまり期待できそうにない [cf. Schwarz 1995: 9-10]。第二に、960年代初めアルプテギンが自軍を率いてヒン

ドゥークシュを越えカーブルに至ったとき、アルプテギンが戦ったのはニザーム・アルムルク (Nizām al-Mulk) やシャバーンカーライー (Shabānqārā'i) によれば、カーブルシャーの王子の軍であり、そうであるならそれは間違いなくヒンドゥーシャーの勢力であってムスリムではなかった。第三に、900年頃、未だサッフアール朝の支配下にあったガズニのまちは、Nāsīd Hindī と Ālmān Hindī という二人の王の率いる軍に攻められている。ラフマン (Abdur Rahman) はこの王の名をそれぞれ、Āṣata と Toramāṇa と復元し、この時点でヒンドゥーシャーがカーブルを奪回していたのだと見ている [Rahman 1979: 111, 114]。『スイースターン史』はその後も910年頃まで、サッフアール朝がカーブルに対してなんらかの権利を有していたかのような記述を載せているが、910年以降、同史書からカーブルの名前は消える [稲葉 1994: 236-237]。また900年以降、サッフアール朝、サーマーン朝およびファールスのアミールの軍勢の間でブストの領有が争われた際も、ガズニに駐留するサーマーン朝軍は資料に言及されるが、カーブルの名前は見えない [cf. Ibn al-Athīr: VII, 79-80, 211]。

以上のことから、ヒンドゥーシャーのカーブル奪回がアルプテギンの到来直前であったとは考えにくい。その一方でサーマーン朝の貨幣は上述のように960年頃までパンジヒール、パルワーンで発行されているから、奇妙ではあるがヒンドゥークシュ南麓はサーマーン朝の影響下にあり、一方パルワーンから距離にして70km弱しか離れていないカーブルはヒンドゥーシャーの支配下にあったという時期がしばらく続いていたと考えるしかない。

このことと関連するかも知れないのが、ヒンドゥーシャーの発行した貨幣である。表面に雄牛、裏面に騎手のデザインを持ち、通称 Bull and Horseman タイプと呼ばれる貨幣に属するヒンドゥーシャー貨幣については、かつてマクドウワル (D. MacDowall) がその編年を試みているが、そこで彼は Samantadeva の銘を持つ貨幣のある段階で突如、銀貨からピロン貨への転換が生じたことを指摘し、これを、パンジヒール銀山がムスリムによって奪われたことと関連づけるのは魅力的だとしている [MacDowall 1968: 210]³⁴⁾。ただしマクドウワル自身の編年によればこのピロン貨が登場するのは10世紀後半のこととなり、サッフアール朝によるパンジヒール掌握とは年代がずれる。彼自身はこの点に関する解決策を提出していないが、そもそもマクドウワルはいわゆる Bull and Horseman タイプ貨幣の最初をテュルクシャーと結びつけて出発しており、現在の我々の知識に照らすならこの年代の枠組みは大幅な修正が必要となる。またシュバルツは10世紀前半を通じてパンジヒール、パルワーンからムスリム貨幣が発行されていることを理由に、パンジヒールの銀山が9世紀末にヒンドゥーシャーの手に戻り、それは10世紀半ばまで続いたのではないかというマクドウワルの仮説を否定している。さらにシュバルツは、9世紀末以降ヒンドゥークシュ南麓で発行されたムスリム貨幣 (サーマーン朝やガズナ朝のもの) の形式にヒンドゥーシャー貨幣の形式

34) Bull and Horseman タイプの貨幣については Tye & Tye 1995: 32 f. も参照せよ。

の影響が見えることに注意を喚起し、それが、特に最初期のガズナ朝がヒンドゥーシャーの造幣所を接収してそのまま貨幣を発行したことによるのではないかと考えている。その最初期のガズナ朝貨は他ならぬパルワーンで発行されているが、ガズナ朝成立よりそれほど遡らない時期にパルワーンにヒンドゥーシャーの造幣所があったことをそれは意味するのだろう。実際シュヴァルツはサーマーン朝とヒンドゥーシャー朝の造幣所がパルワーンにおいて隣接していた可能性も指摘しているのである [Schwarz 1995: 7]。この仮説はトレッドウェルが述べるパンジヒールのまちの有様と比較すると興味深い。すなわち、たとえまち自体がサーマーン朝の影響下にあったとしても、掘り出された鉱石の3分の2は鉱夫やまちの住民の手を経てどこか別のところへ売られた可能性があり、それがヒンドゥーシャーの手に渡ったとしても不思議ではない。さらにサーマーン朝の貨幣とヒンドゥーシャーの貨幣が並行してパルワーンで造られていたとするなら、そのことは、先に見た10世紀中頃のパルワーン貨幣に名が見えるアフマド・ブン・ユースフとナスル・ブン・アフマドが、サーマーン朝の総督ではなくパルワーン近辺の在地の領主であり、状況に応じてサーマーン朝の貨幣もヒンドゥーシャーの貨幣も製造することを認めていた、という状況を示すのかもしれない³⁵⁾。

残念ながら、資料の不足により、上述の問題については、いくつかの可能性を述べる以上のことは現時点ではできない。それでも貨幣資料からわかるのは、10世紀前半を通じてヒンドゥークシュ山脈越えの三つの主要ルート、すなわちゴールバンド溪谷経由、パンジヒール溪谷経由、およびサラング峠越えは全てサーマーン朝の影響下にあったらしいという事実である。このことは、アルプテギンがなぜヒンドゥークシュを越えたのかを考える際にも参照すべき事実であろう。筆者はかつて、ヒンドゥークシュ南側が当時インド世界、すなわち聖戦の場であり、政治的軍事的活路を求めたアルプテギンが自らのベンチャーを成功させるために思い切った方針を採ったのだ、と説明したことがあるが、実際にはサーマーン朝の息のかかった地域を進んでヒンドゥークシュ南麓に出たというのが実情に近いかも知れない。もしそうであるならアルプテギンの軍がバーミヤーン王の軍勢と戦ったのは、異教徒との聖戦ではなく、彼を追撃しようとしていたブハラ宮廷によって送られた軍とフルム (Khulm) で戦ってかろうじて勝利し、ヒンドゥークシュ山中に入ったところで、再びサーマーン朝側勢力と出くわして戦わざるを得なかった、ということだったのかもしれない [稲葉 1994: 234 参照]。

以上本稿で論じた内容を簡単にまとめておくと：

35) 先に引いたコーウェルとロウィック (1988) の分析は10世紀のムスリム銀貨を対象にしたものだったが、ヒンドゥーシャーの銀貨について同様の分析が可能となれば、パンジヒールの銀がムスリム貨幣が発行されるようになった後もヒンドゥーシャーによって使用されたかどうか、手掛かりを得ることが出来るかも知れない。また彼らは、パンジヒール銀山がイスラム時代以前からずっと採掘されていたかも知れないと述べているが、ヒンドゥーシャー貨幣に先立つ、Tegin Shahi 貨幣 (7-9 世紀)、Nezak Shāh 貨幣 (6?-7 世紀) についても同様の分析が行われれば、パンジヒール銀山の歴史そのものがさらに明らかになるかも知れない。

1. 8世紀後半、ムスリムの統治は間接的ではあれバーミヤーンに影響し、またイブラーヒームの遠征によって、ゴールバンド渓谷経由でヒンドークシュを越える道はムスリムの影響下に一旦入ったと思われる。
2. 9世紀後半、ヤアクーブ・ブン・アルライスの征服によってカーブルおよびヒンドークシュ南麓がムスリムの支配下に入った後、パンジヒール渓谷にはアンダラブからバニージュール家あるいはバダフシャーのアミール家が手を伸ばしたらしい。
3. 900年にイスマーイールがアムル・ブン・アルライスの軍を打ち破ってサーマーン朝の覇権を打ち立てると、サーマーン朝に服属したようである。結果として、アンダラブからパンジヒール、さらにはパルワーンとバーミヤーンにおいてサーマーン朝の貨幣がつくられるようになる。
4. 10世紀前半のどこかの時点で一旦ガンダーラに撤退していたヒンドゥーシャー勢力はカーブルを取り戻したと考えられる。が、その間ヒンドークシュ南麓ではサーマーン朝の貨幣が造られ続け、結果としてコー・ダーマン平原を挟んでムスリムとヒンドゥーシャー勢力が一種の共存状態にあったようである。これが後者による前者への服属を意味するのかどうかは明らかではない。

もちろん、以上概観したような状況の背景にはイスラム世界のフロンティアに存在したであろう数多の地方小勢力の動向、とくにそれが広域国家の統治にどのような形で組み込まれていったのかという問題が存する。イスラム教徒が到来する前夜、玄奘三蔵は「観貨羅」(トハーリスターン)が27の小勢力に分かれ、総体として突厥に服属していたと記録している [cf. 桑山 1987: 10, 129-131]。ヒンドークシュ山脈南北の地勢を考えても、そのような政治的細分化はこの地域の特徴として持続されていたと推測される。玄奘は彼が訪れた時点の状況を静的に切り取ったのであろうが、このような小勢力は時と状況に応じて、隣接する他の勢力や時として到来するより強力な広域勢力との間の関係を取り結びつつ、ダイナミックに変動し続けたに違いない。バカラックが想定するようなアンダラブの9世紀末の有り様はまさにそのような動きの一齣なのだろう。同様の状況が存したと考えられるマワラー・アンナフルと、このヒンドークシュ山脈南北におけるそのような小勢力のあり方を総合的に検討することによって、我々は「イスラム化」や「イスラム世界の拡大」というテーゼに実質的な形で取り組むことができるようになると思える³⁶⁾。

* 本稿は科学研究費補助金基盤研究 (C)「出土資料とくに貨幣資料に基づく古代アフガニスタン史の再検討」(課題番号 24520801)による研究成果の一部である。

36) 750年ころまでのイスラム世界の東方フロンティアにおける在地の小勢力とカリフ政権の関係のあり方についてはルース (M. D. Luce) の研究 [Luce 2009] がある。

参考文献

- Abū al-Faḍl 'Allāmi, *Ā'in-e Akbari*. 2 vols., H. Blochmann (ed.), Calcutta, 1877.
- Adamec, L. (1985) *Political and Historical Gazetteer of Afghanistan*. vol. 6. Graz.
- Bacharach, J. L. (1976) Andarāb and the Banjūrīds. *Afghanistan Journal* 3(4), 147-150.
- Ball, W. (1982) *Archaeological Gazetteer of Afghanistan*. 2 vols., Paris.
- Barthold, W. (1984) *An Historical Geography of Iran*. tr. by S. Soucek, Princeton University Press, 1984.
- Bayhaqī, Abū al-Faḍl, *Tārikh-e Bayhaqī*. 'A. A. Fayyād (ed.), Mashhad, 1977.
- al-Bīrūnī, Abū Rayḥān, *Tahqīq mā lil-Hind*. Beirut, 1983.
- Bosworth, C. E. (1965) Notes on the pre-Ghaznavid history of Eastern Afghanistan. *The Islamic Quarterly* 7, 3-22.
- Bosworth, C. E. (1968) *Sistān under the Arabs, from the Islamic Conquest to the Rise of the Saffārids (30-250/651-864)*. Rome.
- Bosworth, C. E. (1981) The Rulers of Chaghāniyān in Early Islamic Times. *Iran* 19, 1-20.
- Bosworth, C. E. (1994) *The History of the Saffarids of Sistan and the Maliks of Nimruz*. Costa Mesa.
- Bosworth, C. E. & M. Ashtiany (tr.) (2011) *The History of Beyhaqi*. 3 vols., Harvard University Press.
- Cowell, M. R. & N. M. Lowick (1988) Silver from the Panjhīr Mines. *Metallurgy in Numismatics* 2, 65-74.
- Cunningham, A. (1871) *The Ancient Geography of India I: The Buddhist Period*. London.
- Diller, Ö. (2009) *Islamic Mints*. 3 vols., Istanbul.
- 藤田豊八 (1931) 『慧超往五天竺國傳箋釋』北平.
- Frye, R. N. (1975) The Sāmānīds. In: R. N. Frye (ed.), *The Cambridge History of Iran 4: The Period from the Arab Invasion to the Saljuqs*. Cambridge, 136-161.
- Fussman, G. (2008) *Monuments bouddhiques de la région de Caboul* II. 2 vols., Paris.
- Ghafur, M. A. (1965-66) Two Lost Inscriptions Relating to the Arab Conquest of Kabul and North West Regions of West Pakistan. *Ancient Pakistan* 2, 4-12.
- Ghirshman, R. (1946) *Bégram: Recherches archéologiques et historiques sur les Kouchans*. MDAFA12, Paris.
- Gyselen, R. (2010) Umayyad' Zāvulistān and Arachosia: Copper Coinage and the Sasanian Monetary Heritage. In: M. Alram et al. (eds.), *Coins, Art and Chronology II: The First Millennium C. E. in the Indo-Iranian Borderlands*. Vienna, 219-41.
- Hackin, J. (1959) Le monastère bouddhique de Fondukistān. In: J. Hackin, J. Carl and J. Meunié (eds.), *Diverses recherches archéologiques en Afghanistan*, MDAFA 8, Paris.
- al-Hamdānī, Abū Muḥammad al-Ḥasan, *Kitāb al-Ġauharatāin al-'Atūqatāin al-Mā'i'atāin aṣ-Ṣafrā' wa'l-Baiḍā'*: Die beiden Edelmetalle Gold und Silber. C. Toll (ed. & tr.), Uppsala, 1968.
- Hennequin, G. (1970) Grandes monnaies Samanides et Ghaznavides de l'Hindu Kush. *Annales islamologiques* 9, 127-177.
- Holdich, T. H. (1901) *The Indian Borderland 1880-1900*. London (reprint Cambridge 2012).

- Ibn al-Athir, 'Izz al-Dīn Abū al-Ḥasan 'Alī, *al-Kāmil fī al-Ta'rikh*. 13 vols., C. J. Tornberg (ed.), Beirut, 1979.
- Ibn Khurdādhbih, Abū al-Qāsim 'Ubaydullāh, *Kitāb al-Masālik wa al-Mamālik*. M. J. de Goeje (ed.), Leiden, 1967.
- al-Iṣṭakhri, Abū Ishāq Ibrāhīm, *al-Masālik wa al-Mamālik*. M. J. de Goeje (ed.), Leiden, 1967.
- 稲葉 稔 (1988) ガズナ朝のハージブ『西南アジア研究』29, 18-37.
- 稲葉 稔 (1990) セルジューク朝と後期ガズナ朝 —— その国境地帯について —— 『東方學報』京都 62 冊, 637-673.
- 稲葉 稔 (1991) 七-八世紀ザープリスターンの三人の王『西南アジア研究』35, 39-60.
- 稲葉 稔 (1994) ガズナ朝の「王都」ガズナについて『東方學報』京都 66 冊, 200-252.
- 稲葉 稔 (2004) アフガニスタンにおけるハラジュの王国『東方學報』京都 76 冊, 313-382.
- 稲葉 稔 (2010a) 8 世紀前半のカーブルと中央アジア『東洋史研究』69(1), 151-174.
- 稲葉 稔 (2010b) 泥孰攷『東方學報』京都 85 冊, 674-692.
- Inaba, M. (2005) The Identity of the Turkish Rulers to the South of Hindukush from the 7th to the 9th Centuries A. D., *Zinbun* 38, 1-20.
- al-Jahshiyārī, Muḥammad b. 'Abdūs, *Kitāb al-Wuzarā' wa al-Kuttāb*. Muṣṭafā' al-Saqqā *et al.* (eds.), al-Qāhira, 1938.
- Jarret, H. S. (1978) *The Ā'in-i Akbarī*. 3 vols, 3rd ed., Calcutta.
- Jewett, A. C. (1948) *An American Engineer in Afghanistan*. M. J. Bell (ed.), Minneapolis.
- Khan, G. (2007) *Arabic Documents*. Studies in the Khalili Collection vol. 5, Nur Foundation, London.
- 桑山正進 (1984) バーミヤーン私注『建築史学』2, 127-150.
- 桑山正進 (1987) 『大唐西域記』(大乘仏典中国・日本編 9), 中央公論社.
- 桑山正進 (1990) 『カーピシー=ガンダーラ史研究』京都大学人文科学研究所.
- 桑山正進 (編) (1992a) 『慧超往五天竺國傳研究』京都大学人文科学研究所.
- 桑山正進 (1992b) ガネーシャ神像碑銘にみえるカーブル突厥王の編年『西南アジア研究』35, 22-38.
- 桑山正進 (1993) 六-八世紀 Kāpīśī—Kābul—Ghazni 地方の貨幣と支配者『東方學報』京都 35 冊, 381-430.
- Kuwayama, S. (2002) *Across the Hindukush of the First Millennium*. Institute for Research in Humanities, Kyoto University.
- Kuwayama, S. (2010) Between Begram II and III: A blank period in the history of Kāpīśī. In: M. Alram *et al.* (eds.), *Coins, Art and Chronology II: The First Millennium C. E. in the Indo-Iranian Borderlands*, Vienna, 283-97.
- la Vaissière, É. de (2010) De Bactres à Balkh, par le Nowbahār, *JA* 298(2), 517-533.
- Luce, M. D. (2009) *Frontier as Process: Umayyad Khurāsān*. Ph. D. Dissertation submitted to University of Chicago.
- MacDowall, D. (1968) The Shahis of Kabul and Gandhara. *The Numismatic Chronicles*, 7 ser. vol. 8, 189-224.
- 間野英二 (訳) (1998) 『バーブル・ナーマ』松香堂.

- Marquart, J. (1901) *Ērānshahr nach der Geographie des Ps. Moses Xorenac'i*. Berlin.
- Masson, C. (1842) *Narrative of Various Journeys in Balochistan, Afghanistan, and the Panjab*. 3 vols., London.
- Minorsky, V. (1970) *Hudūd al-'Ālam (The Regions of the World) : Translation and Commentary*. C. E. Bosworth (2nd ed.), Cambridge.
- Mitchner, M. (1973) *The Multiple Dirhems of Medieval Afghanistan*. London.
- 宮本亮一 (2012) バクトリア語文書中にみえるカダグスタンについて『東方學報』京都 87 冊, 413-448.
- al-Muqaddasi, Muḥammad b. Aḥmad, *Aḥsan al-Taqāsīm fī Ma'rīfat al-Aqālim*. M. J. de Goeje (ed.), Leiden, 1967.
- Novotony, S. (2007) The Buddhist Monastery of Fondukistān, Afghanistan — A Reconstruction. *Journal of Inner Asian Art and Archaeology* 2, 31-37, 181-182.
- Rahman, A. (1979) *The Last Two Dynasties of the Śāhis*. Islamabad.
- Rahman, A. (1993) Date of the Overthrow of Lagaturman—The Last Turk Śahi Ruler of Kabul. *Lahore Museum Bulletin*, 6(1-2), 29-31.
- Rahman, A. (1998) The Zalankot Bilingual Inscription, *EW* 48(3-4), 469-473.
- Rahman, A. (2005) New Light on the Khingal, Turk and the Hindu Sahis. In : O. Boppearachchi & M. -F. Boussac (eds.), *Afghanistan : Ancien carrefour entre l'est et l'ouest*, Brepols, 413-420.
- RIP-ABC : *Records of Intelligence Party : Afghan Boundary Commission*. 5 vols., Simla, 1888.
- Sachau, E. (1888) *Alberuni's India*. 2 vols., London.
- Schwarz, F. (1995) *Sylloge Numorum Arabicorum Tübingen : Ġazna/Kabul (XIV Zurāsān IV)*. Berlin.
- Schwarz, F. (2002) *Sylloge Numorum Arabicorum Tübingen : Balḥ und die Landschaften am oberen Oxus (XIV c Zurāsān III)*. Berlin.
- Sims-Williams, N. (2000) *Bactrian Documents from Northern Afghanistan I: Legal and Economic Documents*. Oxford.
- 『大正新脩大藏經』全 88 卷, 大藏出版, 1924-1934.
- Tārīkh-e Sistān*. Malik al-Shu'arā Bahār (ed.), Tehran, 1935.
- Treadwell, L. (2009) *Craftsmen and coins : signed dies in the Iranian world (third to the fifth centuries AH)*. Vienna.
- Tye, R. & M. Tye (1995) *Jitals*. Isle of South Uist.
- Vasmer, R. (1925) Beiträge zur muḥammadanischen Münzkunde : Die Münzen der Abū Dā'ūdiden. *Numismatische Zeitschrift* 58, 49-62.
- 家島彦一 (訳) (1999) 『大旅行記』4. 平凡社東洋文庫.
- al-Ya'qūbī, Aḥmad b. Abū Ya'qūb, *Kitāb al-Buldān*. M. J. de Goeje (ed.), Leiden, 1967.